

## 安部公房の東欧体験 —「勇気づけ」としての旅—

ハビャン・ビシャレアル・ニーナ

---

### 1) 序論

本論文は、1956年のチェコスロヴァキア及びルーマニアへの訪問が安部の創作に与えた影響を考察するものである。安部の東欧体験と旅行の印象は訪問の約一年後に発表された紀行文『東欧に行く—ハンガリア問題の背景』において描写された。その一方、訪問を通して安部が抱いた所感、妻真知への手紙、旅行直後に発表された旅行記及び報告書、または安部が参加した座談会の記録において書かれ、残されている。よって、本論では、東欧体験の影響がいかなるものであったかを明らかにするため、旅行後に発表されたこれら全ての資料を検討し、紀行文の分析を行う。

安部公房は1956年4月28日にチェコスロヴァキアに到着した。安部の初めてのヨーロッパへの訪問の理由は、4月22～29日にプラハで行われたチェコスロヴァキア作家大会に出席するためであった<sup>1</sup>。大会の主催者であったチェコスロヴァキア作家同盟は、チェコスロヴァキア以外の国から45人の代表者を招待し、安部公房は日本の代表者として参加することとなった<sup>2</sup>。主催者は実際には、日本の代表者として徳永直を招待していたが<sup>3</sup>、徳永の代わりに当時新日本文学会の常任幹事及び国民文化会議の学部会常任委員を務めていた安部が派遣され、大会の最後の二日間に参加することとなったのであった。大会後は、6月24日までチェコスロヴァキア及びルーマニアを旅行し、プラハでソヴィエト及びチェコスロヴァキアの演劇を体験することになる。妻真知宛てに送った手紙から読み取れるように、安部はチェコスロヴァキアその他、ユーゴスラヴィアを旅することを望んでいた<sup>4</sup>。スロヴァキアのタトラ山から1956年5月4日に送られた第一信の手紙には、次のように書いている。

それから、人形映画のことなどをしらべて、ユーゴ・スラヴィア行きの計画をたてます。バルカンまわりは中止しました。とても大変です。ユーゴだけは行ってみたいと思いますが、ユーゴもだめなら、チェコの西端のボヘミア地方を見て、そのままパリに戻ろうかと思っています<sup>5</sup>。

その8日後、プラハに戻った安部は第二信の手紙において次のように説明している。

チェコスロヴァキアを見るだけでも、なかなか大変です。バルカン旅行は大体あきらめました<sup>6</sup>。

帰国の1ヶ月後、安部は俳優座夏期ゼミナールにおいて「最近の外国演劇を語る—チェッコ、ルーマニア」という講演を開き、その一週間後は「現代芸術の会」の第九回例会で「東欧に復活するアヴァンギャルド」という講演を行う。また、『知性』誌<sup>7</sup>の1956年9～10月号には「東ヨーロッパで考えたこと」及び「日本共産党は世界の孤児だ—続 東ヨーロッパで考えたこと」という題名で東欧の旅行記を発表する。『知性』誌で発表された旅行記は1957年に出版される紀行文『東欧に行く—ハンガリア問題の背景』の元となっており、この紀行文のおおよそ3分の1を占めている。1956年10月号の『新日本文学』には、チェコスロヴァキア作家大会において行われた文学に関わる報告のうち、三つの報告の日本語訳が、「芸術の当面する諸問題」という題名で発表されている。これら三つの報告は、同大会でなされた報告のなかで、安部自身が最も重要だったと考えたものである<sup>8</sup>。

## 2) 『東欧に行く—ハンガリア問題の背景』

『東欧に行く—ハンガリア問題の背景』は1957年2月15日に大日本雄辯會から出版される。『知性』に掲載される旅行記と同様に、『東欧に行く』には旅行からの写真及び挿絵が含まれるが、その中には安部が写っている写真の他、安部自身が撮ったとおぼしき写真が多く含まれている。『東欧に行く』から読み取れる安部公房の東欧の体験を検討するにあたり、まず、その体験を視覚的に表している写真の分析を行いたい。

### 2.1 写真から見た東欧



写真1:「プラグの街角で」<sup>9</sup>

上述の通り、『知性』誌に掲載された安部の旅行記「東ヨーロッパで考えたこと」及び「日本共産党は世界の孤児だ—続 東ヨーロッパで考えたこと」には、チェコスロヴァキアとルーマニアで撮影された数枚の写真が挿入されている。「東ヨーロッ

パで考えたこと」と題される旅行記の前半には3枚の写真が挿入されているが、その中の2枚は安部自身が撮った写真だと考えられる。それぞれの写真には簡単な文章も付されており、全ての写真のモチーフとなっているのは人間である。



写真2：「スロヴァキアの田舎で行けばどこでも見られる居酒屋風景<sup>10</sup>」



写真3：「ブカレストにて。通訳のヴェロニカ娘と。彼女はルーマニア政府の役人である<sup>11</sup>。」

1956年10月号の『知性』誌に掲載された「日本共産党は世界の孤児だ—続 東ヨーロッパで考えたこと」という旅行記の後半には、下記の2枚が挿入されている。



写真4：「ルーマニアの大都会コンスタンツアの停車場。理想的社会主義国といわれるが停車場はこのありさまだ<sup>12</sup>。」



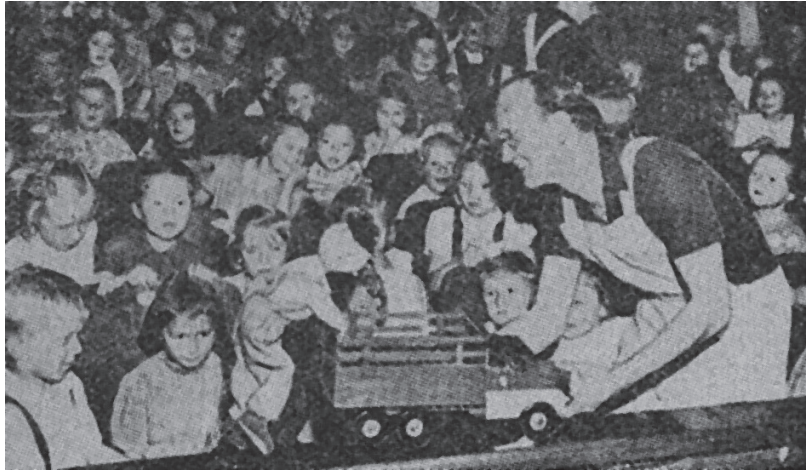


写真5：「子供達と人形遊びに興じる人形映画制作者 プラーク<sup>13</sup>」

『東欧に行く』には20枚の写真が掲載されているが、『知性』では文章と混ざり合った形で写真が挿入されていたのとは異なり、全ての写真は口絵の欄に掲載され、写真自体も『知性』誌の写真とは異なる。『東欧に行く』には著者が写る写真を含めて、人を主なモチーフにする写真が5枚、人形映画の写真が3枚、建物の外見と、街の風景等の人が主なモチーフになっていないものが9枚と、タオルの模様や彫像の写真が3枚挿入されている。このように、『知性』の旅行記に比べて、『東欧に行く』には街および風景の写真がより多く挿入されている。本論文では、写真のそれぞれのカテゴリーを代表する数枚の写真を具体的に検討しながら、安部の眼差しを分析したい。20枚の中からは、人が主なモチーフになっている2枚、とりわけ著者の写真と、ジプシー部落の写真の他、タオルの模様の写真と街の風景の写真を選択した。



写真6：回教寺院前にて著者



写真7：ジプシー部落にて

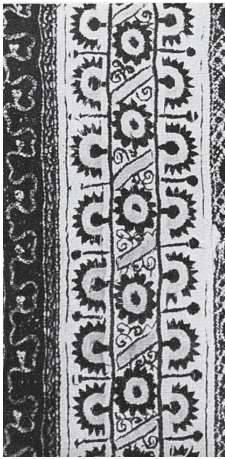


写真 8：タオルの端



写真 9：錬金術師の家

『東欧に行く』に掲載された写真は口絵であり、撮影の場所及び時期が不明な写真が多い。安部の写真の説明文は短く、写真の対象となっている場所及び建物を描写する文章が多い。また、写真が撮られた国・場所に関する記述が少ないため、上記の4枚のうち、撮影地を特定できるのは「ジプシー部落にて」とキャプションが付けられた1枚だけである(写真7)。安部がジプシーの部落を訪れたことは紀行文の本文で述べられているため、この写真がスロヴァキアの「タトラ山のふもとの小さな町」で撮られたものであることがわかる<sup>14</sup>。

写真は紀行文以外にも、安部の創作にしばしば挿入されている。『密会』と『箱男』等、安部の70年代以降の作品においては<sup>15</sup>、安部自身が撮った写真が文章と同様に重要な位置を占めている。その意味で、彼の紀行文における写真の説明文と、小説における写真の説明文の役割は異なっている。紀行文の場合とは異なり、小説で写真に付されている文章は必ずしも写真を描写しておらず、写真と文章は対等な関係にある。

70年代以降に小説に挿入される写真と紀行文の写真の違いとしては、次に、そのモチーフ及びテーマが挙げられる。安部の70年代以降の小説には、多くの場合、都会を写した写真が挿入されている。ただし、そこに人が写るのは稀である。都会の暗く、通常は見過ごされてしまうような場所の写真が最も多く、それらは、それぞれの小説の物語と呼応して、都会での生活の様々な側面を象徴的に表している。一方、日常において見過ごされる都市の暗部のようなものを写したこれらの写真とは異なり、『東欧に行く』に挿入されたさまざまな場所や建物の写真には、社会主義国における人々の日常が写されている。

また、70年代以降出版される小説での写真に対して、『知性』誌及び『東欧に行く』の写真は、安部が訪問した国々の人を主題にしていることもあり、人間が写っていない写真のほうが少ない。風景の写真が多く挿入されているものの、『東欧に行く』には街の写真が多く、人々の日常生活の風景が写されている写真が多い。このように、旅行記であることを考えると、チェコスロヴァキア及びルーマニアの風景、特に自然の風景の写真が少な

いことがむしろ目立つと言える。安部自身が「私は風景なんかどうでもよろしい」と『東欧に行く』で書いているが<sup>16</sup>、掲載されている写真の選択からも、安部が風景よりも、東欧の人々とその習慣にひかれ、特にその日常生活、習慣と文化に関心を持っていたということが分かる。人形映画と木彫の農婦の彫像の写真からは、安部のチェコの芸術への興味が明らかであり、田舎町の農夫とその牛、楽師や、民族衣装をつけている花嫁の写真は、安部が東欧の風景よりも、人々の習慣及び伝統に興味を抱いていたことを表しているといえる。

## 2.2 チェコスロヴァキア作家大会の報告

『東欧に行く』から分かる安部の東欧体験を検討する前に、チェコスロヴァキア作家大会に多大な影響を与えたソ連共産党第20回大会に触れよう。

チェコスロヴァキア作家大会の報告者は、1956年2月14～25日に開催されたソ連共産党第20回大会に頻繁に言及するが、ソビエト連邦の内外政策により開かれた同大会は、スターリン死後の初めての大会としてスターリン批判の機会となった。坂が書いているように、第20回大会には「日本でも高い関心が持たれていた」<sup>17</sup>。この第20回大会では、スターリンへの個人崇拝がもたらした弊害の他、暴力革命の必要性への否定と平和共存の重要性が強調される。その結果、2ヶ月後に行われたチェコスロヴァキア作家大会においては、重要なテーマとして文学作品における個人崇拝の思想があげられ、第20回大会への言及が多くなされている。

上述の通り、作家大会の28～29日、つまり最後の二日間に出席した安部は、印象に残った三人の報告を紀行文に記載している。安部が選択したのは、チェコスロヴァキア共産党による報告、そして、チェコスロヴァキア作家同盟書記長であったヤン・ドゥルダ（1915-1970）および、アヴァンギャルド詩人ヴィーチェスラフ・ネズヴァル（1900-1958）による報告であった<sup>18</sup>。この三つの報告は、安部の関心を引いたものであっただけではなく、安部の意見と重なったものであると考えられる。

一つ目の報告は、チェコスロヴァキア共産党が作成し、当時のチェコスロヴァキア大統領及び首相であったアントニン・ザポトッキーが読み上げた公開書簡の内容に関するものである。公開書簡では、第二次世界大戦後に執筆された作品が社会主義リアリズムの発展の象徴であることが強調され、若い世代の作家たちの勇気と想像力が賞賛される。また、文学を発展させるには、できるだけ多くの才能を発展させる必要があることが指摘され、作家の数は多ければ多いほど良いと主張される<sup>19</sup>。

二つ目の報告は、上述の通り、当時作家同盟書記長だったヤン・ドゥルダによる一般報告である。彼の報告では、作家同盟が過去に犯した間違いが認められ、作家同盟の過去の行動が反省的に顧みられる。ドゥルダによれば、作家同盟という組織の徹底的な改革が必要であり、その背景としていくつかの理由があげられている<sup>20</sup>。作家にとって何よりも重



要なのは勇気と「原則性」であると語るドゥルダは、作家同盟がその代わりに持ち出してきたのは独断と教条であったと指摘する<sup>21</sup>。また、作家は現代を理想においてではなく、事実において積極的にとらえなければならないと、彼は指摘する<sup>22</sup>。作家が面白いエピソードを採集しさえすれば作品ができるという考えのもと、同盟は、作家を見物旅行に送り出していたが、ドゥルダはこの報告においてその試みが無意味であったことを認めている<sup>23</sup>。また、ドゥルダが説明しているところによれば、「作家は作品をつくるまえに、まず内部の世界に入らなければならないのであり<sup>24</sup>、「自分でその内部を生活してみなければならぬ」のであるという<sup>25</sup>。

三つ目の報告は、詩人のヴィーチェスラフ・ネズヴァルによる「現代詩の問題」という題名のものである。ネズヴァルは芸術の中心的な要素としてユーモアを取り上げ、現代のチェコの詩にはユーモアこそが欠乏していると指摘する<sup>26</sup>。その上で彼は、若い世代の作家及び詩人の中には、才能やユーモアを持つ者が数人いると主張し、その名前をあげる<sup>27</sup>。

鳥羽によれば、訪問の最初の二日間にこの報告を聞いた安部は彼らの「発言を肉体化し、新たな目を獲得した」のであった<sup>28</sup>。その結果、報告後に執筆された紀行文は安部の「新たな目」を通して観察されたものであり、「この旅行は、目論見通り、『コミュニストである私』の現実が変貌していく過程となった」のであると鳥羽は指摘している<sup>29</sup>。安部自身の意見が上記の報告とどう重なるかを『東欧に行く』を検討しながら考えよう。

### 2.3 対話としての旅行

安部の旅行に対する態度は、紀行文の冒頭から明確である。安部によれば、旅行というのは無意味である。彼自身の言葉を借りれば、「真に意義のある旅行は、ただ未知の危険にたちむかう冒険旅行だけであり、現実でそのような闘いをはらんだ旅はむしろ身近な現実の内側にある」<sup>30</sup>。しかし、安部が旅行というものに対して抱いていたある種の「偏見」は、チェコスロヴァキアでの大会に出席するためヨーロッパへ向かった後に、正されることとなる。

しかし私はいまでもそれをただの偏見だとは思っていない。あの偏見があったればこそ、そこから脱け出すこともできたのだと思う。私は印象に極力抵抗した。抵抗したおかげで混乱した。混乱したおかげでいくばくかの収穫をうることができた<sup>31</sup>。

旅行に対して「偏見」を持ち、旅に抵抗していたからこそ、安部はその「偏見」を直す必要があると分かり、その結果として混乱する。しかし、1957年4月号の『世界』誌に発表される「偏見を育成しよう」において安部は「だから私は、やや逆説めくが、むしろ「偏見」を愛する精神をこそ強調したいと思うわけである」と述べている<sup>32</sup>。「偏見」

を否定するのではなく、肯定的なものとして認めたからこそ、収穫をえることができたのだと安部は語る。その結果、彼は旅行を「新しい仮説のもとでなされる対話の実験」と表現し<sup>33</sup>、旅を「現実からの単なる断絶ではなく、現実をよりよくとらえるためにその間に新しい操作を挿入する」ものとして捉え始めるのである<sup>34</sup>。旅行に抵抗していた安部は要するに、観光に抵抗を持ち、観光より有意義な体験を期待していた。安部は東欧で求めていたことを都会で見つけられると考え<sup>35</sup>、社会主義国の矛盾を発見することに決める<sup>36</sup>。安部は次のように書いている。

今度の旅行で私がなによりも期待していたものは、まさにその新しい社会主義的矛盾の発見にほかならなかったわけである<sup>37</sup>。

しかし、矛盾のすべてを2ヶ月で掴めないことを、彼は自覚していた<sup>38</sup>。鳥羽の指摘によれば、安部は、「目に映る事物を描くことよりも、目に映らない『真相』を暴き出すことを（中略）期待」したのであり<sup>39</sup>、それを見つけ出すためにチェコスロヴァキア及びルーマニアを旅行することになる。

また、冒頭の頁から指摘されているように、東欧の訪問は、安部の日本との対話の機会である。つまり、東欧の紀行文は実際、東欧をより良く理解するためのものではなく、日本の現状を考え直し、より良く把握できるためのものである。安部は、「本物の私はいぜんとして日本にあり、チェコにいるのは私の分身」であると考え<sup>40</sup>、自分が「ぴんと張った電線のように緊張しはじめていた」と感じる<sup>41</sup>。

## 2.4 「偏見」と国境

島国である日本から大陸国家チェコスロヴァキアへの旅は、「偏見」及び国境への考察に至る。安部はチェコ人とスロヴァキア人の性格の違いについての会話を聞き、大陸国の「偏見」について考察しはじめる。その考えは訪問後に発表される文章において、次のように展開されている。

明確に対立物を意識している（せざるをえない）ヨーロッパ人の方が、偏見に対する抵抗はげしいと同時に、偏見の度合もまたはるかに強いのだ。そしてこの対立のエネルギーこそ、社会発展の原動力に他ならない<sup>42</sup>。

安部によるヨーロッパ人の「偏見」の検討は、「偏見」と国境との関わりに移り、安部が「国境病」と呼ぶ現象に至る。1956年8月号の『美術批評』に掲載された「チェコ作家大会とその周辺」という題の座談会では、国境によって限られた東欧の国々においては、民族主義が思ったより独特な形で働くと安部は主張している<sup>43</sup>。坂はこの傾向の原因



としてスターリン主義の影響をあげ、抑制された諸民族のナショナリズムが高揚していたことは想像に難くないと指摘している<sup>44</sup>。大陸国家を島国である日本と比較しながら、安部は次のように論じる。

海は自然物だが、陸地の国境は社会的な政治的な壁だ。そこから文学も強い個性がつけられてくる。ユーモアやアイロニーの習慣が農民のなかにまでしみこんでいるのに驚いた（省略）<sup>45</sup>。

国境は物質的な境界であるだけではなく、ある国の社会的及び政治的な壁でもあり、国境があるからこそヨーロッパの国々の個性が作られていくと安部は考える。しかし、安部がヨーロッパで発見するのは、国境による個人への影響だけではなく、ある国家内に存在する「偏見」である。スロヴァキアを旅行する際、安部はブラティスラヴァの郊外におけるジプシー村に辿り着き、チェコスロヴァキアという国家の内部にある抑圧されている少数民族に出会う。鳥羽が書いているように、安部はチェコスロヴァキアの内部の「国境」を発見したのである<sup>46</sup>。真知への手紙において書いているように、この発見は安部の関心を引いた経験だった。

今日は珍しいところに行きました。ジプシーの部落です（中略）実に面白い連中なので、すこし、しらべてみようと思います<sup>47</sup>。

また、紀行文で彼は、訪問したジプシーの村が、自身が満州で見た中国の田舎町に似ていたと書いている<sup>48</sup>。ジプシーという抑制された少数民族と、日本によって支配された満州との間に、様々な共通点が見出されると安部は言うのだ。ただし、彼は、ジプシーを国内の「国境」としてあげつつも、ヨーロッパ人の民族主義の否定的な側面を強調するのではなく<sup>49</sup>、そのエスノセントリズムを社会主義国の「矛盾」として捉え、そこに社会の変革を促す可能性のきっかけを見ている<sup>50</sup>。

## 2.5 伝統と創造力の関係

上述の通り、安部は4月28日にプラハに到着し、29日まで続いた作家大会に出席するが、日本に帰国するまでの間に2ヶ月弱チェコスロヴァキア及びルーマニアを旅行する。大会が終わってからの4日間は、大会に出席していた作家たちとともにスロヴァキアに出発し、集団での見学を行った。その後は文化省の役人が作成した日程表に従いながら<sup>51</sup>、単独行動でスロヴァキアの各地を通訳者とともに自動車で旅行する。しかし、スロヴァキアを旅行する間、安部は「革命的なものよりも伝統的なものが、矛盾より秩序が、支配的」であることに気づき<sup>52</sup>、旅行を諦め、帰国前の2～3週間をプラハで過ごす。スロ

ヴァキアで体験した伝統とその重い抑圧の結果、安部は伝統への考察に移る。政治と文化の伝統については次のように書く。

現代はすべて伝統にたいする愛情と憎悪、継承と断絶の複雑なからみ合いである<sup>53</sup>。

安部によれば芸術家は伝統を継承するか、断絶するかを決め、現代芸術はその結果、伝統に対する愛情か憎悪を表す。スロヴァキア旅行からプラハに戻った安部はその後、プラハの伝統を考察し、プラハの芸術家による伝統への抵抗と受容を検討する。ところが、安部がプラハで発見するのは、内省的なユーモア、風刺や空想力に恵まれている芸術作品である<sup>54</sup>。ユーモアがチェコの文学の中心にあるという安部の考えは、ネウヴァルのチェコスロヴァキア大会での報告と重なると言える。安部はこの特徴を「チェコのなもの」として捉えるが、チェコのものが最も端的に現れているのは人形映画だと指摘する<sup>55</sup>。人形映画の監督としてはイジー・トルンカとその作品の前衛精神を取り上げ<sup>56</sup>、前衛精神が人形映画を通して民衆の中に染み込んでいると主張する<sup>57</sup>。前進を要求するアヴァンギャルドがプラハで興隆した結果、プラハの芸術的発展は最も進んでいると安部は考える。プラハの芸術家の現代精神については、1957年2月16日号の「中部日本新聞」に掲載される記事において次のように述べている。

表面的には、いかにも古典的な沈うつを感じさせるのだが、その内側をのぞくと、きわめて現代的な精神が、いきいきと脈うっていることがわかる。こうした文化面の特徴がその工業力の高さとあいまって、昨今東欧をはげしくゆさぶった変動の中でも、比較的平穏をたもちえた理由だったのではあるまいか<sup>58</sup>。

プラハの芸術および文化を高く評価する一方、安部はチェコとチェコスロヴァキアを「西洋で一番日本についての知識がふかくまた研究がすすんでいる国」として認め<sup>59</sup>、「東欧諸国のうちではチェコの水準は一番といってよい程高い」と主張する<sup>60</sup>。スロヴァキアの旅行を諦めた安部は、プラハで「目に映らない『真相』」を暴き出した。それは、チェコで経験したソヴィエト演劇の上演でのことだった。

プラハでの滞在の際、安部はいくつかの演劇を観るが、彼に最も強い印象を与えたと言えるのは、マヤコフスキーの『蚤』である。安部は、「まだ日本新劇のしめっぽさにまきこまれ、その毒気にあてられて、空想力が減退させられていた」のだが、演出家エミル・フランチシェク・ブリアンによる『蚤』の演出を観ることによって空想力の減退に対する懸念が解消したと述べている<sup>61</sup>。演劇を観ながら目に涙が込み上がるほど感動し、安部は「私の芝居が上演されている夢を見たくらいで」あったと書いている<sup>62</sup>。安部は東欧訪問前に数多くの小説の他、戯曲『制服』<sup>63</sup>、『どれい狩り』<sup>64</sup>、『快速船』<sup>65</sup>、『少女と魚』<sup>66</sup>と『永久運動』<sup>67</sup>を発表しているが、訪問後にはさらに戯曲の創作に取り組み、1956年

11 月には《演劇手帳》の編集委員の一人になる<sup>68</sup>。

上述の通り、安部は東欧及びソ連の演劇を高く評価するが、彼によれば「スラヴの中の前衛精神」はスターリン時代を通して抑制されていた。スターリン批判以後になって文学芸術の解放が行われ、それによって社会主義リアリズムというジャンルにおいて民族的伝統の復興がみられたという<sup>69</sup>。つまり、安部は、チェコ及び全てのスラヴ民族の特徴として見られる前衛精神は、社会主義リアリズムに新しく付け加えられたものとしてとらなければならないと指摘している<sup>70</sup>。

ただし、安部はチェコスロヴァキアとルーマニアで観た全ての演劇に関心を持ったわけではない。プラハで観た四つの演劇の中、感動し、勇気を与えられたのはただ一つだけであったと述べ、それとは異なる性質の演劇として《軍隊劇場》で鑑賞したナズム・ヒクメットの「愛の伝説」という芝居をあげている。これは、軍人により演出され、上演される演劇であり、その観客は主に軍隊の関係者であったが、安部は芝居の筋がつまらなく、演技と演出がブリアン劇場より劣っていたと考えている。「愛の伝説」の上演をヨーロッパの旧式なものとして捉え、日本の新派に似ていると指摘する<sup>71</sup>。それ以外にも、若い俳優による芝居を観て、素朴だったが、舞台には新鮮さがあったという感想を残している<sup>72</sup>。

プラハの劇場で観た演劇と異なり、ルーマニアで観た芝居は 19 時から 24 時までという 5 時間も続くものであり、安部は退屈してしまい、題名すら忘れ、絶望的な体験だったと回想する<sup>73</sup>。

## 2.6 「勇気付け」としての旅

上述の通り、安部は東欧の旅行に当初あまり関心を持っておらず、旅行する行為は無意味であると考えていたのだが、紀行文の冒頭においては次のように書いている。

正直にいうと、はじめ私はこんどの旅行にあまり期待をかけていなかった。(中略) コミュニストである私には行くまえからもう結果が分かっているような気がして、すこしも意気があがらなかった<sup>74</sup>。

安部は旅行を有意義なものとして捉えていなかったとはいえ、出発時刻が近づく時には次のように述べる。

出発の日が近づくとともに、この感情はますますひどくなり、たぶんまだ見ない外国の風物が私にあたえるであろう印象に先まわりしてやろうという反抗的な気持ちから、無意識にでも大紀行分の一節がつぎからつぎへと湧きおこって、これをそのまま書きのこせば、行く前に旅行記の一つくらい書いてしまえそうな気がしたほどである<sup>75</sup>。



旅行の印象に抵抗した安部は、印象に先まわりするように出発前に紀行文の文章を考え、旅行後に『東欧に行く』として出版されるはずの旅行記を頭の中で創作する。しかし、ヨーロッパに到着するとまもなく、それまでの経験に基づいて想像していたヨーロッパとは異なった、新たな雰囲気的环境に出会う。プラハに到着してから九日後には真知宛の手紙において次のように書く。

やっとヨーロッパのフニキに馴れました。そしてヨーロッパを理解できたような気がします<sup>76</sup>。

訪問前から東欧の文学作品を読んでいた安部は、文学と映画を通して東欧の「内側」を知ったと述べるが、東欧の訪問によってヨーロッパの外側を体験し、ヨーロッパという現象を全体的に把握し、理解できるようになったと書いている<sup>77</sup>。

しかし、安部の印象は理解で終わらない。真知への手紙に記しているところによれば、日本を離れた結果、以前構想したものの書くことのできなかった作品を書く必要があることに気づき、また、日本を離れたからこそ、その必要性が十倍もよく分かったのだという<sup>78</sup>。安部は次のように述べている。

遠くから見ると、全景がよく分かります<sup>79</sup>。

ところが、安部は手紙においては執筆予定の作品を「例の富士山の小説」として描写し、1956年の文芸日記においても「今年の仕事」の第一目の作品として「富士山のジャンヌ」「題一長編」に言及する<sup>80</sup>。また、1月2日の記載には、「とにかく今年は『富士山のジャンヌ』を完成しなければならぬ」と書くが<sup>81</sup>、帰国後に出版された作品の中には、「富士山の小説」にあたりと考えられる作品は存在しない。針生一郎との対談において安部は「今度、富士をテーマにするやつも、新しい意味の農村小説が書けるんじゃないかという気がする」と述べるが<sup>82</sup>、小林が指摘しているように日本への帰国後、「農村小説」にあたる作品として発表される作品は『鏡と呼子』だけである<sup>83</sup>。針生との対談において、安部は富士山についての農村小説を書きたいと言いながら、「家出息子が戻ってくる」という農村小説の要素に言及している<sup>84</sup>。小林によれば、安部は執筆中であったはずの「富士山のジャンヌ」を断念し、家出息子の帰省をテーマにする農村小説を書き、その結果として『鏡と呼子』が発表されたのである<sup>85</sup>。

このように、真知宛ての手紙に言及された「富士山の小説」は「家出息子の帰省」の農村小説に変わるが、いずれにせよ、安部が『鏡と呼子』の創作の必要性を理解するに至ったきっかけは、東欧への訪問であったと言える。以前執筆できなかった小説を東欧訪問後に発表できたという安部の主張の結果、東欧での体験は彼の創作過程に影響を与えたと考えられる。しかし、安部の作品には地名が書かれていない場合が多く、直接的に東欧での

経験がそれとわかる形で小説に登場することがないため、彼のどの作品が東欧での体験から生まれたものであるのかを特定することは難しい。一方、安部が東欧で体験したことを踏まえて、『鏡と呼子』を検討すると、安部に影響を与えたのは、人民を監視する体制であり、周りの世界から切り離された国々の発想だったように思われる。『鏡と呼子』では、疎外された村を訪れた、東欧を訪問した安部自身に似た「異邦人」は、村人から監視されていることに気づく。『鏡と呼子』の分析からわかるのは、東欧の影響が地名等のような形で表現されるのではなく、このような新しい発想として現れるということである。

また、前述の通り、安部はジプシーの部落にたどり着き、ジプシーに関心を持つようになった。社会から疎外された人々、または他者のモチーフは、『鏡と呼子』においてだけでなく彼の後期の作品に頻繁に現れる。多くの写真が挿入されている『箱男』は、都会にしながら、周りの世界からは不可視である路上暮らしの男が出現し、『砂の女』には『鏡と呼子』と同様に、周りの世界から切り離された小さな村にたどり着く異邦人が主人公として現れる。安部の作品はこのように、『鏡と呼子』に続く作品においても、東欧での体験に影響を受けたモチーフ及びテーマを頻繁に使用しており、その意味で、安部の当初のジプシー等の民族への関心は、彼の後の執筆活動にも強く影響したと推定できる。

### 3) 訪問の背景

すでに述べた通り、安部公房は国民文化会議と「新日本文学会」の代表者として、チェコスロヴァキア作家大会に出席したのであった。よって、本章では、訪問のきっかけとなり、また、紀行文の執筆にも影響を与えた様々な文学組織及びグループと安部の関係についてより詳しく検討する。

#### 3.1 運動としてのルポルタージュ

実のところ、安部は東欧訪問の際、新日本文学会とは異なる文学組織に参加していた。彼が当時参加していた組織のうち代表的なものは、ルポルタージュを中心とした文学運動として結成された「現在の会」及び、その後身の「記録芸術の会」である。ルポルタージュを運動にして取り上げた理由として、安部は『ルポルタージュとは何か?』に収録される「ルポルタージュの意義」において「リアリズムの前進のためにという文学上の要請であり、いま一つは急激に変動する、したがってとらえにくくなった社会の姿を正しく報告するという現実上の要請からです」と書いている<sup>86</sup>。

「現在の会」は1952年1月に安部公房、真鍋呉夫と島尾敏雄によって結成され<sup>87</sup>、1952年6月からは『現在』という機関誌を発刊した。『現在』誌の刊行は1955年9月まで続き、全部で14号が刊行される<sup>88</sup>。『現在』誌は、会員の創作の他、座談会、詩、雑記、レポート、そして、「現在図書館」という寄稿者会員による作品への書評等のコラムで構成

される。機関誌の他、「現在の会」は、国内外の反動支配権力に押さえられた国民各階層が日常的に経験した矛盾を自分たちの目を見て、その真実を広く伝えることを目的として、1953年8月には「私たちの報告」シリーズを刊行している。安部はルポルタージュを書く必要性について次のように考える。

分析の欠如した、怠慢な小説から脱出し、リアリズムに本当の綜合力をあたえ、典型の創造を可能にするために、私たちはまず解剖刀を要求したわけです<sup>89</sup>。

安部は、リアリズム小説の発展にとって不可欠な要素の一つとして、ルポルタージュを挙げる。そして、リアリズムを前進させるためには、真実を語る必要があると考え、そのためには解剖刀に似た道具で日常性を切り裂き、その内部を追求する必要があると述べる。つまり、安部が主張しているのは、ルポルタージュ自体がリアリズムの解剖刀であることであり、ルポルタージュの追求により、リアリズム文学を前進させる必要があるということである。安部の言葉を借りれば、「文学、あるいは認識というものは一般に分析と綜合の統一であります、ルポルタージュはとくにその分析的傾向で特徴づけられます」<sup>90</sup>。

1955年9月号は『現在』誌の終号となるが、「夜の会」と「世紀」を経て「現在の会」<sup>91</sup>は、1957年5月19日<sup>92</sup>から「記録芸術の会」として1961年まで続き、1959年から1961年まで『現代芸術』誌を発行することになる。『現代芸術』には創作、現代芸術についてのエッセイ、写真、座談会、提言、書評、評論の他、「紀行」及び「世界の芸術運動」というコラムがあり、寄稿者が旅行した国々の情勢も言及される。『現代芸術』は1959～1961年の間、全14号を発行するが、安部はその中の計13号に創作を発表し、座談会の参加者としても参加している。

リアリズム文学を前進させる必要性という安部の考えはまた、当時の「新日本文学会」の会員の間でも討論されていた問題である。第二次世界大戦後の日本文学を新しい方向へと前進する試みとして、「新日本文学会」と関わった作家は日本の現実を正しく把握しようとし、文学作品をその媒体として使用したといえる。組織の第8回大会においては、「日本の現実の認識と改善とにたいする文学者の関係・責任が急速に明瞭になり、さまざまな角度からの文学者の社会的発言が求められ、それが大衆の生活的・政治的要求とそのためへの戦いとに、またそこから生まれる大衆の文学的要求と到着とに結び付けられている<sup>93</sup>」と中野重治が指摘し、戦後日本における「新日本文学会」の役割を強調したのである。中野重治はまた、第8回大会での一般報告において記録芸術運動を積極的に認め、それぞれの運動及び組織が共同の場面で研究しあうよう提言を行なったが、『「新日本文学」の60年』の編集者鎌田慧によれば、中野の提言は現実のものとならなかった<sup>94</sup>。

前述の通り、安部はチェコスロヴァキア作家大会で聞いた報告の中から三つを選択し、その日本語の要約を『東欧に行く』において掲載するが、その報告では、リアリズムと社会主義リアリズムの発展と前進が論じられる。第二回目の報告において、ヤン・ドゥルダ



は作家にとって最も重要なものとして勇気と原則性の他、「事実を書くこと」をあげている<sup>95</sup>。ドゥルダによれば、社会主義国の文学は常に生活の事実を表現し、現代の人々、現代の生活と社会主義の建設等を「真にリアルに<sup>96</sup>」表す必要があるものであり、彼の発言と「新日本文学会」の主張の重なりが明らかである。安部のルポルタージュ運動との関わりはこのように、チェコスロヴァキア作家大会とそこで討論された問題と深く関わっていると言える。また、安部がチェコスロヴァキア作家大会に送られたことも、「新日本文学会」が認めていた文学の発展と密接に関わっていることは、上記の情報から明らかである。一方、安部は「新日本文学会」に入会してから間も無く組織から離れるが、それが上記のリアリズムの前進とどのように関わっているかを次に論じたい。

### 3.2 新日本文学会及び日本共産党の批判

「現在の会」と「記録芸術の会」の会員としての安部の活動を考える際、安部の「新日本文学会」との関わりを検討する必要がある。

かつて、日本共産党と密接に関わった組織である『人民文学』に寄稿していたことのある安部は、1955年には最も若い常任幹事の一人として「新日本文学会」に入会する。「新日本文学会」も『人民文学』と同様に、日本共産党に従い、その会員の多くは共産党に入党していたが、共産党を代表する唯一の文学雑誌として1950年に選ばれたのは『人民文学』であった<sup>97</sup>。「新日本文学会」と『人民文学』は1952年まで対立的な関係にあったが、1955年に行われた新日本文学会第7回大会で和解し、以前『人民文学』誌に寄稿していた安部が「新日本文学会」の常任幹事として選出されることとなる。Schnellbacherが書いているように、50年代前半には、安部自身は寄稿を試みていたにもかかわらず、『新日本文学』に彼の文章が掲載されることはなかったが<sup>98</sup>、1955年からは安部の作品が雑誌に掲載されるだけでなく、雑誌の表紙でも言及されるようになる。安部の帰国は例えば、『新日本文学』の1956年10月号の表紙で発表されるが、Schnellbacherによれば、それはソ連共産党第20回大会の秘密報告で行われたスターリン批判の結果として生じた社会主義国での変化に対して「新日本文学会」が抱いていた関心の表れである<sup>99</sup>。また、安部の東欧訪問と『東欧に行く』の出版の影響として認められるのは、「新日本文学会」における彼の立場の変化だけではなく、安部の作家としての地位の変化である。要するに、安部の作品が『新日本文学』に発表されるようになったのは、彼が「新日本文学会」の常任幹事として東欧を訪問したことの結果であったと言える。東欧の訪問後及び『東欧に行く』の出版後、安部は『新日本文学』において二つのエッセイを発表し<sup>100</sup>、「新日本文学会」会員のいくつかの座談会に参加し<sup>101</sup>、安部の脚本をもとにした映画のはじめての批評が掲載される<sup>102</sup>。また、東欧の訪問後、安部は1957年と1959年に二回も幹事会及び常任幹事会の会員として改選される。

一方、Schnellbacherが指摘しているように、安部の文学界における位置の強化とともに

強化されるのは、安部が50年代前半から進めていた前述のルポルタージュの運動である<sup>103</sup>。『新日本文学』誌には実際、安部が常任幹事として選出された1955年の1月、2月と3月号の「原稿募集」欄において記録・ルポルタージュを募集する広告が載せられている<sup>104</sup>。1955年5月号には中本たか子のルポルタージュ「風止まず—その後の焼津—」、そしてその続きである6月号の「春陽—その後の焼津（2）—」が『新日本文学』誌に掲載されているのは、この募集の結果によるものと考えられる。このように、『新日本文学』においてもルポルタージュが重要な位置を占めていたと言える一方で、安部は東欧訪問後に「新日本文学会」から遠ざかり、離れていくこととなる。前述の通り、安部は1955年には常任幹事として「新日本文学会」に入会するが、東欧訪問の約一年後に「新日本文学会の組織としての停滞は否定出来ない」と書いている<sup>105</sup>。

当時、日本共産党と密接に関わっていた『人民文学』と『新日本文学』は共産党のプログラムに従う必要があったため、安部は1956年の東欧訪問後に「新日本文学会」から離れると同時に、安部に対する日本共産党からの批判も強まり、1962年2月には党から除名処分を受ける。ところが、入会の4年後に『人民文学』及び『新日本文学』両方から離れた安部は、文学組織の重要性を否定はしない。作家同志に創作の意味とその有意義性を以下のように述べる。

それは作家同志が最も根本的なところで結びあう、創作方法による結びつきという点を、組織上の重要な単位として再確認するのだ。創作というものは、ある意味で極めて個人的なものであり、個人の果す役割は大きい、同時にその個人を包む創作方法を中心にしたグループが持つ意味もまた無視することは出来ない。とりわけ二十世紀芸術の一つの大きな特徴は、作家の仕事が個人よりも芸術運動として、集団的に表現される傾向が強い<sup>106</sup>。

安部は文学組織として「新日本文学会」の改革が必要であると考え、その解決方法として作者同士の創作方法というところでの結び合いを提案するが、戦後日本文学の発展に関する安部の考えは、チェコスロヴァキア作家大会においてチェコスロヴァキア文学の発展について論じていたドルダの報告と重なると言える。また、チェコスロヴァキア作家大会に送られた安部自身の「新日本文学会」の常任幹事としての課題は、文学組織の改革を行うことであり、「新」日本文学を作ることであったように思われる。そのため、安部は、チェコ及びスラヴ民族の特徴として自身が捉えていた前衛精神に促され、アヴァンギャルドのジャンルとしてのルポルタージュを中心にした「記録芸術の会」を結成し、日本の前衛主義文学の発展を目指したのではないだろうか。

### 3.3 文学組織の意義

また、安部は文学組織の意義を日本国内の状態において認めるだけではなく、文学組織とその活動を翻訳と繋げ、文学の発展に不可欠であると書く。東欧での体験の結果、安部は文学組織の可能性を知り、その可能性を実現する組織として「新日本文学会」ではなく、「記録芸術の会」とその機関誌『現代芸術』を選択したと考えられる。東欧を体験したことは、安部を、文学組織と作家の関係の重要性の認識へと至らせ、その結果として、彼は日本の文学組織にも国際的な空間を作り出すことを目指すようになる。安部は次のように書いている。

最近ソヴェトでもグループ活動の再評価がなされているらしい。次の大会までに、そうした諸外国の新しい経験を、会としてホンヤク紹介してほしい。社会主義国、人民民主主義国の作家同盟の規約、綱領、その共通点や相違点、あるいは歴史的変遷の研究などは当然もっと研究される必要がある<sup>107</sup>。

## 4) 結論

安部は東欧を訪問し、自分の東欧紀行について紀行文を執筆したはじめての作家ではない。1950～60年代を通して日本共産党の党員であり、社会主義及び共産主義に関心を持った結果、東欧を訪問した日本の作家は少なくない。その中には安部を除けば、例えば野間宏、大江健三郎、開高健と埴谷雄高という日本の戦後文学を代表した作家も入っており、日本と東欧諸国の関係は特に20世紀後半を通して深まったと言える。これらの作家は訪問を通して戦後日本文学の推進及び発展を目指し、社会主義国の文学を考察しながら、その方法を模索したと言える。また、上記の作家の中には、前述の「現在の会」及び「記録芸術の会」の会員として活躍した者もあり、ルポルタージュと日本の証言との関わりも彼らの紀行文の執筆に密接に繋がっていたと考えられる。

文壇に登場してから10年も経たない頃、32歳の安部は「新日本文学会」の常任幹事となり、上記の作家たちと同様に日本の戦後文学を新しい方向へと発展させるために、チェコスロヴァキア作家大会に送られるが、この体験は安部自身の「偏見」を正すきっかけとなり、彼のヨーロッパ認識に変化をもたらした。安部の東欧訪問は実際、強い抵抗と旅行の印象の否定ではじまるが、以前から文学及び映画を通して知っていた東欧を旅行し、その外側を体験した結果、安部は自分自身の旅行に対する「偏見」を正すだけではなく、旅行そのものが日本との対話のきっかけとなったと語るに至る。旅行後に発表される座談会、旅行記、紀行文等や、安部が帰国後に開く講演の中には、東欧の印象に触れたものが多く、安部が『東欧に行く』において論じた概念や現象への言及は訪問の一年後まで続く。東欧の体験が、安部が帰国後に創作した作品にどのような影響を与えたかは興味深い



問題であるものの、安部作品では特定の場所等への言及が少ないため、『鏡と呼子』以外は具体的に作品名を挙げることはできない。東欧の体験による最も深い印象及び影響としてあげられるのは、チェコ及びソ連の演劇とその演出であるように思われる。なぜなら、1973年に発足される「安部公房スタジオ」に至るまでの安部の演劇活動の背景には、チェコスロヴァキアの劇場で観察した芝居があり、安部に勇気を与えたブリアンの劇場があるからである。上述の通り、ドゥルダによれば文学を発展させるためには勇気が必要であるが、東欧の体験が安部に与えたのは、勇気そのものだったと言える。

注

1. 安部公房が出席したのは、チェコスロヴァキア作家同盟（“Svaz československých spisovatelů”）が開催した第二回チェコスロヴァキア大会である（“II. sjezd Svazu československých spisovatelů”）。1回目の大会は1949年3月4～6日に行われた。両方の大会は、当時、チェコスロヴァキア作家同盟書記長であったヤン・ドゥルダが司会をつとめた。第二回大会は1952年に予定されたが、政治的な理由及びスターリンの死で何回も延期された。（Bauer, Michael, ed. “II. sjezd Svazu československých spisovatelů 22. – 29. 4. 1956”, Akropolis, 2011, pp. 9）
2. Bauer, Michael, ed. “II. sjezd Svazu československých spisovatelů 22. – 29. 4. 1956”, Akropolis, 2011, pp. 23
3. 同書、25。徳永は1954年12月にソ連作家同盟により開催された第2回ソ連作家大会に招かれ、岩上順とともに大会の最後の日（12月26日）に出席する。（浦西和彦編「徳永直」『人物書誌大係1』日外アソシエーツ、1982年、198頁）
4. 安部公房「安部真知宛書簡第一信」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、81頁
5. 同書、79頁
6. 安部公房「安部真知宛書簡 第二信」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、81頁
7. 雑誌年鑑昭和14年版での記述によれば、『知性』誌は「一般に新しき知識階級を対象とする総合文化雑誌」（312）及び「詩、詩論、作品評等詩に関する総合雑誌」（250）であった。
8. 安部公房「芸術の当面する諸問題〈チェコスロヴァキヤ作家大会・報告と要旨〉」『新日本文学』10月号、第三書館、1956年、148頁
9. 安部公房「東ヨーロッパで考えたこと」『知性』9月号、河出書房、1956年、66頁
10. 同書、61頁
11. 同書、56頁
12. 同書、48頁
13. 安部公房「日本共産党は世界の孤児だ—続 東ヨーロッパで考えたこと」『知性』10月号、河出書房、1956年、55頁
14. 安部公房、『東欧に行く——ハンガリア問題の背景』講談社、1957年、27頁
15. 近藤一弥、安部公房「安部公房—写真の文学」『IMA』秋5号、進藤博信発行、2013年、158頁
16. 安部、前掲書、『東欧に行く』、19頁
17. 坂堅太『安部公房と「日本」植民地・占領経験とナショナリズム』和泉書院、2016年、118頁。坂によれば、スターリン批判の言説の最初の言及として、フルシチョフ報告が1956年四月号の『中央公論』に掲載され、『世界』の4～7月号にはスターリン言説をめぐる記事が刊行されている。（121頁）
18. ヴィーチェスラフ・ネズヴァルは第二次世界大戦前にアヴァンギャルドに傾倒していた詩人であり、戦後には社会主義国の体制側の詩人になった。安部は紀行文においてネズヴァルをチェコの「アヴァンギャルド詩人」と描写し、彼の芸術におけるユーモアの重要性等の発言に頻繁に同意を表す。
19. 安部、前掲書、『東欧に行く』、78頁
20. 安部「チェコ作家大会とその周辺」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、102—103頁
21. 安部、前掲書、『東欧に行く』、83頁
22. 安部、同書、91頁
23. 同書、89頁
24. 同書、89頁
25. 同書、90頁
26. 同書、93頁
27. 同書、100頁。ネズヴァルがあげているのは、バヴェル・コホウト、ミラン・クンデラ、ミロスラフ・フロリ

- アン、ミロ斯拉フ・チェルヴェンカである。
28. 鳥羽耕史『『国境』の思考』『文芸と批評』8—5、1997年、46頁
29. 同書、48頁
30. 安部、前掲書、『東欧に行く』、9頁
31. 同書、14—15頁
32. 安部公房「偏見を育成しよう」『安部公房全集 007』新潮社、1998年、120頁
33. 安部公房、前掲書、『東欧に行く』、14頁
34. 同書、14頁
35. 同書、39頁
36. 同書、48頁
37. 同書、51頁
38. 同書、52頁
39. 鳥羽耕史『『国境』の思考』『文芸と批評』8—5、1997年、43頁
40. 安部公房、前掲書、『東欧に行く』、14頁
41. 同書、12頁
42. 安部、前掲書、「偏見を育成しよう」、119頁
43. 安部公房「チェコ作家大会とその周辺」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、92頁
44. 坂、前掲書『安部公房と「日本」植民地・占領経験とナショナリズム』、132頁
45. 安部、前掲書「チェコ作家大会とその周辺」、93頁
46. 鳥羽、前掲書『『国境』の思考』、48頁
47. 安部、前掲書、「安部真知宛書簡 第一信」、79頁
48. 安部公房、前掲書、『東欧に行く』、28頁
49. 安部を国境の考察に導くのは、スロヴァキア人とチェコ人の会話であるが、安部は同様な傾向をハンガリー人、ドイツ人、ポーランド人、フランス人、ルーマニア人にも気づいている。(45頁)
50. 安部、前掲書、『東欧に行く』、48頁
51. 同書、20頁
52. 同書、48頁
53. 同書、53頁
54. 安部公房「知的な夢想家—チェコと国交回復の日に」『安部公房全集 007』新潮社、1998年、108頁
55. 同書、108頁
56. 安部、前掲書、『東欧に行く』、62頁
57. 同書、122頁
58. 安部、前掲書「知的な夢想家—チェコと国交回復の日に」、108—109頁
59. 安部公房、前掲書、『東欧に行く』、22頁
60. 安部公房「チェコの旅から」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、85頁
61. 安部、前掲書、『東欧に行く』、121頁
62. 同書、122頁
63. 1954年12月号の《群像》に発表される戯曲。
64. 1954年12月号の《文芸》詩には小説として発表され、1955年9月15日には戯曲として戯曲集《どれい狩り・快速船・制服》に収録される。
65. 1955年8月24日に劇団青俳が演出し、『どれい狩り』と同様に1955年の《どれい狩り・快速船・制服》に収



録される。

66. 1953 年 7 月号の《群像》に発表される。
67. 1956 年 3 月号の《文學界》に発表される。
68. 谷真介編『安部公房評伝年譜』新泉社、2002 年、53 頁
69. 安部、前掲書、『東欧に行く』、123—124 頁
70. 同書、125 頁
71. 同書、126—127 頁
72. 同書、127—128 頁
73. 同書、130 頁
74. 同書、10 頁
75. 同書、10 頁
76. 安部、前掲書、「安部真知宛書簡 第二信」、81 頁
77. 安部、前掲書、『東欧に行く』、11 頁
78. 安部、前掲書「安部真知宛書簡 第二信」、81—82 頁
79. 同書、82 頁
80. 安部公房「文芸日記 1956」『安部公房全集 005』新潮社、1997 年、424 頁
81. 同書、424 頁
82. 安部公房、針生一郎「解体と総合」『新日本文學』11 卷、昭和 31 年、自 1 月至 4 月、2 月号、150 頁
83. 小林治「昭和 30 年代の安部公房短編作品について (2)」駒澤短大國文、34 号、2003 年、92 頁
84. 安部、針生、前掲書「解体と総合」、150 頁
85. 小林、前掲書、「昭和 30 年代の安部公房短編作品について (2)」、92—93 頁
86. 安部公房「ルポルタージュの意義」「ルポルタージュとは何か?」『日本の証言』現在の会編集、柏林書房、6 頁
87. 谷真編、前掲書『安部公房評伝年譜』、40 頁
88. 鳥羽耕史『『現在』解説・解題、回想、総目次、作品』三人社、2015 年、6 頁
89. 安部公房「ルポルタージュの意義」「ルポルタージュとは何か?」『日本の証言』現在の会編集、柏林書房、1955 年、9—10 頁
90. 同書、8 頁
91. 鳥羽によれば、「〈現在の会〉は〈夜の会〉にはじまり、〈世紀〉を経て〈記録芸術の会〉に至る、安部公房ら第二次戦後と前衛芸術家のグループと、真鍋呉夫ら戦時下に福岡で発足した同人誌『こをろ』に集まったメンバー、さらに後に〈第三の新人〉と呼ばれることになる吉行淳之介らのグループとで発足したが、最後まで中心となったのは安部公房のグループである。」(鳥羽、前掲書、「『現在』解説・解題、回想、総目次、作品」、6 頁)
92. 「記録芸術の会」の花田清輝、安部公房、佐々木基一、野間宏等のメンバーは、1956 年秋頃から月一回、新宿・中村屋などで会合を持つが、「記録芸術の会」の公式発表は翌年の 5 月に行われる。(谷真介編『安部公房評伝年譜』新泉社、2002 年、53 頁)
93. 新日本文学会編『日本文学の現状とその方向 新日本文学会第七回大会報告集』河出書房版、1955 年、38 頁
94. 鎌田慧編『新日本文学の 60 年』七つ森書館、2005 年、177 頁
95. 安部、前掲書、『東欧に行く』、83 頁
96. 同書、84 頁
97. Schnellbacher, Thomas. “Abe Kōbō, Literary Strategist”, Iudicium, 2004, pp. 92
98. 同書、209 頁
99. 同書、214 頁

100. チェコスロヴァキア作家大会を扱う「芸術の当面する諸問題」が1956年10月号に、「文学組織のアクチュアリティ」が1957年4月に発表される。
101. 安部は、1956年9月号の「戦艦ポチョムキンと現代映画」、1957年1月号の「ハンガリー問題と文学者」、1957年2月号の「共産主義と文学。共産党、新日本文学会批判」、1957年5月号の「抽象的小説の問題」に参加する。
102. 1957年1月に発表される小林正樹の『壁あつき部屋』を扱う批評である。
103. 同書、214頁
104. 新日本文学会編「原稿募集」『新日本文学』1月号、1955年、172頁  
新日本文学会編「原稿募集」『新日本文学』2月号、1955年、172頁  
新日本文学会編「原稿募集」『新日本文学』3月号、1955年、172頁
105. 安部公房「文学組織のアクチュアリティ」『安部公房全集 007』新潮社、1998年、134頁
106. 安部、前掲書「文学組織のアクチュアリティ」、135頁
107. 同書、135頁

#### 参考文献

安部公房『東欧に行く——ハンガリー問題の背景』大日本雄辯會、1957年

安部公房「東ヨーロッパで考えたこと」『知性』9月号、河出書房、1956年、56—68頁

安部公房「日本共産党は世界の孤児だ—続 東ヨーロッパで考えたこと」『知性』10月号、河出書房、1956年、48—61頁

安部公房「文芸日記 1956」『安部公房全集 005』新潮社、1997年、423—428頁

安部公房「安部真知宛書簡 第一信」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、79—80頁

安部公房「安部真知宛書簡 第二信」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、81—82頁

安部公房「チェコ作家大会とその周辺」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、92—108頁

安部公房「チェコの作家大会から」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、86—90頁

安部公房「チェコの旅から」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、85頁

安部公房「動乱と知識人」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、452—464頁

安部公房「共産主義と文学——日本共産党批判・新日本文学批判」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、249—272頁

安部公房「芸術の当面する諸問題〈チェコスロヴァキア作家大会・報告と要旨〉」『新日本文学』10月号、第三書館、1956年、148—159頁

安部公房「ハンガリー問題と文学者」『安部公房全集 006』新潮社、1998年、215—232頁

安部公房「偏見を育成しよう」『安部公房全集 007』新潮社、1998年、116—120頁

安部公房「〈コミュニストに問う〉『キング』のアンケートに答えて」『安部公房全集 007』新潮社、1998年、18—20頁

安部公房「文学組織のアクチュアリティ」『安部公房全集 007』新潮社、1998年、134—135頁

安部公房「知的な夢想家——チェコと国交回復の日に」『安部公房全集 007』新潮社、1998年、108—109頁

安部公房、針生一郎「解体と総合」『新日本文学』11巻、1956年、自1月至4月、2月号、150頁

安部公房「ルポルタージュの意義」「ルポルタージュとは何か？」『日本の証言』現在の会編集、柏林書房、1955年、6—12頁

- 安部公房、小林勝「私たちの報告 刊行の言葉」「ルポルタージュとは何か?」『日本の証言』現在の会編集、柏林書房、1955 年、6—12 頁
- 呉美延『安部公房の〈戦後〉——植民地経験と初期のテキストをめぐって』図書出版クレイン、2009 年
- 浦西和彦編「徳永直」『人物書誌大係 1』日外アソシエーツ、1982 年
- 鎌田慧編『新日本文学の 60 年』七つ森書館、2005 年
- 桑尾光太郎「戦時下の『知性』」『神奈川大学評論』23 号、神奈川大学、1996 年、184—185 頁
- 小林治「昭和 30 年代の安部公房短編作品について (2)」駒澤短大國文、34 号、2003 年、91—102 頁
- 近藤一弥、安部公房「安部公房——写真の文学」『IMA』秋 5 号、進藤博信発行、2013 年、145—160 頁
- 坂堅太「安部公房の東欧体験—— коммуニストの 1956 年」日本文学 / 日本文学協会編、2013 年、33—43 頁
- 坂堅太『安部公房と「日本」植民地・占領経験とナショナリズム』和泉書院、2016 年
- 新日本文学会編『日本文学の現状とその方向 新日本文学会第七回大会報告集』河出書房版、1955 年
- 田所泉『「新日本文学」の運動歴史と現在』新日本文学会出版部、1980 年
- 谷真介編『安部公房評伝年譜』新泉社、2002 年
- 鳥羽耕史「『国境』の思考」『文芸と批評』8-5、1997 年、41—50 頁
- 鳥羽耕史『『現在』解説・解題、回想、総目次、作品』三人社、2015 年
- 鳥羽耕史『運動体・安部公房』一葉社、2007 年
- 宮西忠正『安部公房・荒野の人』葺柿堂、2009 年
- 日本読書新聞社雑誌年鑑編集部編『雑誌年鑑』昭和 14 番、大空社、1988 年
- 米岡幹夫「安部公房の政治的理念に関する論功——『東欧を行く—反ガリア問題の背景』から——」『社会文学』18 号、日本社会文学会、2003 年、48—58 頁

Bauer, Michael, ed. “II. sjezd Svazu československých spisovatelů 22. – 29. 4. 1956”, Akropolis, 2011.

Jesty, Justin. “Art and Engagement in Early Postwar Japan”, Cornell University Press, 2018.

Schnellbacher, Thomas. “Abe Kōbō, Literary Strategist”, Iudicium, 2004.

# Abe Kōbō's Experience of Eastern Europe

## - A Writer's Growth Through Travel

---

Nina HABJAN VILLARREAL

---

This paper sets out to analyze Abe Kōbō's travelogue *Tōō o yuku – Hangaria mondai no haikai*, which focuses on his travel to Czechoslovakia and Romania in 1956, and his attendance at the II. Congress of the Czechoslovak Writers' Union as an official representative of the Japanese association *Shin Nihon bungakukai*. His travelogue, published in 1957, describes Abe's unique experience of the art, society, and social order of these socialist countries and offers a unique look into his creative interests and the way his experience of theater, literature, and animated motion pictures of the region had inspired him as an artist. A combined analysis of both his non-fictional travelogue as well as his fictional work could potentially shed light on the influences this unique experience in Eastern Europe had on his literary production in the following years and more importantly, on the course of Japanese literature in the 20<sup>th</sup> century in general, however, this article focuses on how his preconceptions and prejudice against travel, and the experience of travel itself shaped his understanding and lead his creativity in a new direction. As Abe's visit to Czechoslovakia and Romania happened in the first decade of his career, a connection can be established between the theater production he experienced in Prague and his latest endeavors as a dramatist. Moreover, a significant result of his visit is Abe's writing of the novel *Kagami to yobiko*, the importance of writing, which he only realized once leaving his home country and creating a distance between him and Japan. His visit to Eastern Europe can thus be understood as the beginning of his dialogue with Japan, which creatively inspired him, gave him additional courage, and lead him in a new direction within the many different literary movements in which he was an active participant at the time.